小 学 校

平 成 15 年 度

教 育 研 究 員 研 究 報 告 書

総合的な学習の時間

東 京 都 教 職 員 研 修 セ ン タ ー

平成１５年度

教　育　研　究　員　名　簿

◎世話人　　○副世話人

地　区	学　校　名	氏　　名
新　宿	市谷小学校	酒井　利江
大　田	矢口小学校	森　真規子
世田谷	東玉川小学校	○畝尾　宏明
北	としま若葉小学校	◎清水　明
板　橋	新河岸小学校	長瀬　泰一郎
練　馬	北町小学校	水上　金也
足　立	西新井第一小学校	宮腰　勉
足　立	花保小学校	向山　敦子
葛　飾	東金町小学校	○鈴木　里織
八王子	長池小学校	国冨　尊
小　平	小平第三小学校	土肥　あゆみ
西東京	谷戸小学校	奥島　真
狛　江	狛江第一小学校	竹谷　正明
多　摩	多摩第三小学校	鈴木　幸子
西多摩郡	瑞穂第四小学校	増田　優子

担当　　東京都教職員研修センター統括指導主事　　酒　井　寛　昭

目　　　次

Ⅰ　研究主題および基本的な考え方

１　主題設定の理由　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　２
２　研究主題にかかわる基本的な考え方について
(1)「自己評価を生かした指導と評価」とは・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　３
(2)「適切な自己評価」と「めざす姿」とは・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　３
(3) 指導と評価の一体化　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　４
(4) 総合的な学習の時間における自己評価の考え方・・・・・・・・・・・・・・・・・　５
(5) 総合的な学習の時間における指導についての考え方・・・・・・・・・・・・・・・　５
３　実態調査より　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　６
４　研究仮説と研究内容　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　８
５　研究構想図　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　９

Ⅱ　主題に迫るために

１　評価規準の作成　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１０
２　効果的な自己評価の方法　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１１
３　自己評価能力の高まりと「指導と評価」について・・・・・・・・・・・・・・・・・　１２

Ⅲ　実践事例

１　事例１　つかむ段階における実践例・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１３
２　事例２　追究する段階における実践例・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１６
３　事例３　広げる段階における実践例・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１９

Ⅳ　研究の成果と今後の課題

１　研究の成果　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　２２
２　今後の課題　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　２２

参考資料１　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　２３
参考資料２　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　２４

Ⅰ　研究主題および基本的な考え方

総合的な学習の時間における
自己評価を生かした指導と評価の在り方

1　主題設定の理由

総合的な学習の時間が全面実施となって２年目に入った今、各学校では様々な学習活動が行われているが、評価についてはまだ共通理解が不十分であり、今後に向けて大きな課題の一つとなっている。

総合的な学習の時間における実態状況調査(平成 13 年度東京都教職員研修センター編)によると、評価の共通理解ができていると回答した学校ほど、子どもに身に付けてほしい力が明確になっている傾向があることが分かる。指導のねらいとなるこの身に付けてほしい力を一層明確にし、いかに評価と関連付けるかが指導と評価の在り方を考える上で重要な鍵となる。また、評価の観点や評価規準があっても、実際には、活動に追われてしまい計画的な評価ができなかったり、評価を行っても、子どもの姿を適切に見取れず指導に十分生かせなかったり、さらに、子ども自身が自己の成長を実感できる評価につながらないなど様々な課題があることが予想される。

そこで本研究部会では、自己評価を指導と評価に生かすことを通してこれらの課題を解決する方法を研究することにした。

自己評価に注目するのは、次の二つの理由からである。

＊　意図的・計画的に自己評価を進めることで子ども自身が自分の成長やよさに気付き、自己評価能力が高まることによって生きる力の育成にもつながる。

＊　子どもの自己評価を進めることで教師はより個に応じた活動の見取りができ、適切な指導に生かすことができる。

２　研究主題にかかわる基本的な考え方について

(1)　「自己評価を生かした指導と評価」とは

総合的な学習の時間のねらいは、子ども一人一人が、主体的に問題を解決する力を身に付け、自己の生き方を考えることができるようにすることにある。したがって、自らの学習を振り返ることで、「主体的に問題を解決する力を身に付けられたのか」「自己の生き方を考えることができたのか」と自分の成長について問う力があることが必要不可欠である。また、そうした自己評価能力に支えられて、子ども自らが成長していくことができ、それを実感できるか否かということは、総合的な学習の時間の指導と評価における大変重要な要素である。

本研究では、自己評価を「より個に応じた子どもの活動を見取るための資料」として、今まで以上に大切に考え活用していくと同時に、「子ども自身が自分の成長やよさに気付くことのできるもの」としてとらえた。

自己評価は、子ども自身に任せておけばそれでいいというものではない。教師は、子どもの自己評価能力を高めていくために、次の３点を踏まえ、意図的・計画的な自己評価ができるようにする役割を担うことになる。

①「いつ」子どもが学習活動を振り返るのか。⇒（評価計画の作成）
②「どのような方法」で振り返るのか。⇒（自己評価カード等の工夫）
③「どのような視点」を基に何を振り返るのか。⇒（評価規準の作成）

(2)　「適切な自己評価」と「めざす姿」とは

③の振り返る視点を子どもの側からとらえたものを「めざす姿」と呼ぶことにした。「めざす姿」とは、子どもが自分たちの思いや願いを明確にして、「こうなりたい」と考えている姿のことである。

総合的な学習の時間では、子どもの主体的な学びが求められているが、子ども主体ということは、すべてを子ども任せにするということではない。教師が子どもに「こうなってほしい」という方向性を明確にもち、「教師が向かわせたい方向」と「子どもがめざす姿」をいつもすり合わせていくというきめの細かいそして、質の高いかかわりが求められるのである。子ども自身の自己評価を生かし、教師が子どもの姿をしっかり見取っていけば、このことが可能になるのである。

そのためには、より「適切な自己評価」が求められる。「適切な自己評価」とは、以下の２つの条件を満たす自己評価である。

＜条件１＞単元のねらい、観点、評価規準に基づいた意図的・計画的な自己評価
＜条件２＞単元のねらい、観点、評価規準に基づいた明確な振り返りの視点がある自己評価

この２つの条件を満たした適切な自己評価により、教師は、より個に沿った活動の見取りができ、指導に生かすことができる。そして子どもは、自分自身の成長やよさに気付き、自己評価能力を高めることができると考えた。

(3) 指導と評価の一体化

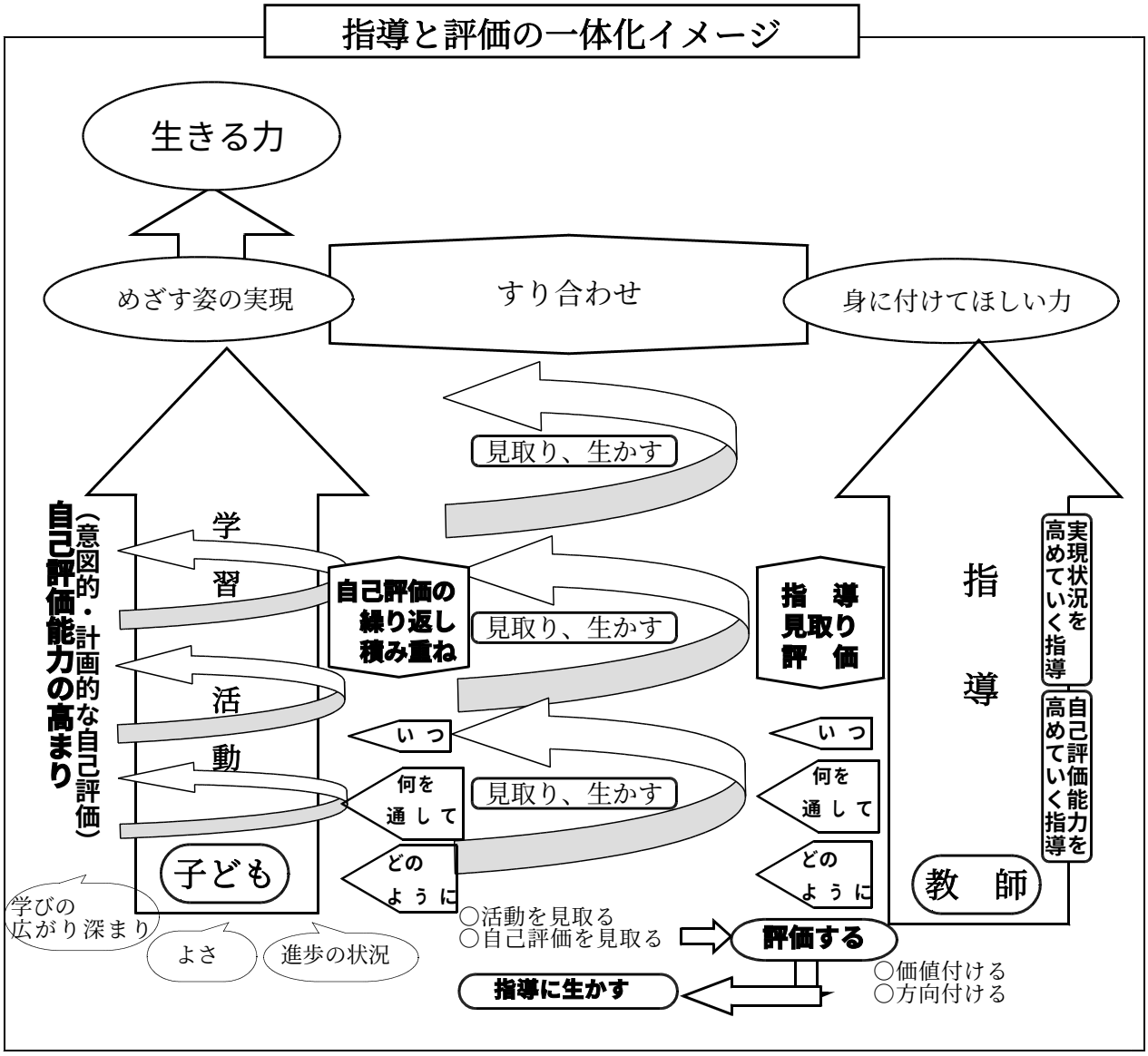
自己評価を意図的・計画的にすることができ、さらに指導に生かすためには、次の視点が欠かせない。

① 自己評価から一人一人の子どもの学びの広がりや深まり、よさ、進歩の状況などをどのように見取っていくのか。（子どもの学習活動とともに見取る）

② 見取ったことを価値付けたり、方向付けたりして子どもの学びや育ちを促す指導へとどのように生かしていくのか。（指導に生かす）

このように、子どもの自己評価や、その他の多様な評価資料から子どもの様子をよりよく見取り、次の指導にすぐ生かしていくことが「指導と評価の一体化」であると考えた。したがって評価は、単元の最終段階だけで行われるものではなく、学習過程において繰り返し行われることが大切である。

自己評価さえ行えば、それで子どもの活動がすべて見取れるというわけではない。教師には、多様な評価により子どもをとらえ、多様な評価と自己評価を関連付けて見取る力も要求されている。私たちは、今回特に、自己評価に絞って指導と評価の在り方について研究を行うことにした。



(4) 総合的な学習の時間における自己評価の考え方

自己評価で大切なことは、明確な振り返りの視点を基に、適切な場面と方法で価値ある評価が自分の力で行われることである。

自己評価する内容（気付き）は次の二つに分けられると考えた。

① 記憶、知識、理解、技能の習得の状況について

「〇〇が分かった」「〇〇が前より早くできた」等自分のよさや成長への気付きであり、量的な内容の側面（量的にとらえられる）である。

② プロセス、表現力、思考力、関心、意欲、態度の状況について

「何に、どのように気付き、どのように思考を巡らせたか」、「自分はこう考えた」「自分はこう理解した」「自分の出した考えの根拠は〇〇だ」等自分のよさや成長への気付きだけでなく、自分の学びの広がりや深まりへの気付きであり、質的な内容の側面である。

この二つの内容の側面は各教科においても重要であるが、総合的な学習の時間では、そのねらいから考えて、後者の考えの方が重要である。しかし、後者の力を子どもが身に付けていくためには、前者の経験が必要であり、各教科における多様な自己評価の経験も重要であると考えた。

(5) 総合的な学習の時間における指導についての考え方

総合的な学習の時間における指導には二つの軸が必要であると考えた。一つは子どもの実現状況を高めていく指導であり、もう一つは子どもの自己評価能力を高めていく指導である。（詳細ｐ１２参照）

すでに(1)～(3)で述べた通りであるが、特に本研究は自己評価能力がある程度身に付けば、それを教師の指導と評価に生かせるだろうと考えたものである。だからこそ、自己評価能力を高める指導が大切なのである。「自己評価能力が高い」とは、自分の実現状況を適切に自己評価できることである。そのためには、子どもたちが明確な振り返りの視点を正確にとらえられるような指導が重要になってくるのである。

このようにして身に付いた自己評価能力を前提にしたとき、子どもによる自己評価を教師の評価資料の一部として有効に活用でき、子どもの実現状況を高めていく指導と評価の一体化に役立てられるのである。

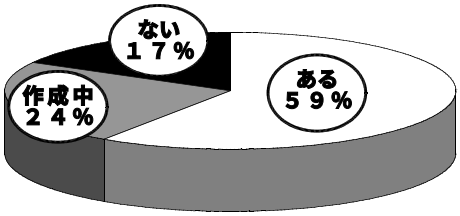
３　実態調査より

本研究では評価に関する実態として「評価規準についての共通理解が不十分で評価規準そのものの整備が進まず、指導が評価にうまく生かせないのではないか」「児童の自己評価が、児童の学習や教師の指導にうまく生かされていないのではないか」と考え、それらの課題を解決する方向性を明らかにするために研究仮説を立て、研究を進めていくことにした。この実態調査は、本研究の考えを裏付ける資料になると考え実施した。

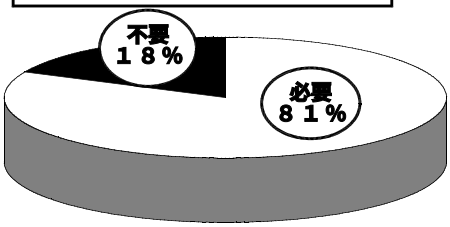
調査時期：平成１５年７月中旬～下旬
調査方法：質問紙
調査対象：都内公立小学校　１７７校　　教諭　３８２名

＜総合的な学習の時間の評価規準について＞

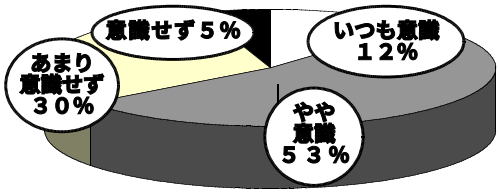
1-1 評価規準はあるか



2 評価規準は必要だと思うか



1-2 評価規準を意識した学習活動をしているか

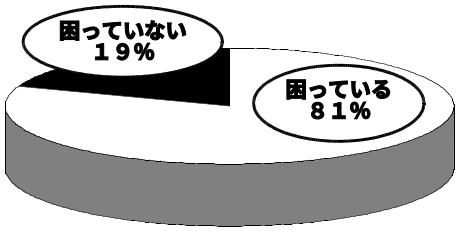


・４割以上の学校で、作成中あるいは、作成されていない
・２割弱の人が不要だと思っている
・作成しても意識のもち方がまちまちである

評価規準に対する認識が不十分

＜総合的な学習の時間における評価上の課題について＞

3-1 評価を行う上での問題点や評価を行う際に困っていることはあるか



多くの教師が、思うように評価を行えず、困っている

3-2 問題点等はどのようなことか（複数回答）

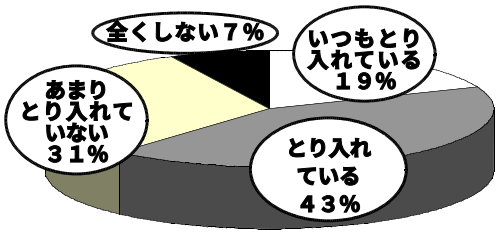
①子ども自身が自己の成長を実感できるような評価につながらない	１２０人
②計画的な評価ができない	１０７人
③子どもの姿がうまく見取れず指導に生かせない	１０３人
④評価規準がない、または評価の観点があいまい	８１人
⑤その他（記述）	４５人

より良い評価方法が求められている

・評価に時間や手間がかかる
・学年全体で活動する際の共通理解が不十分である
・評価規準自体が不備である

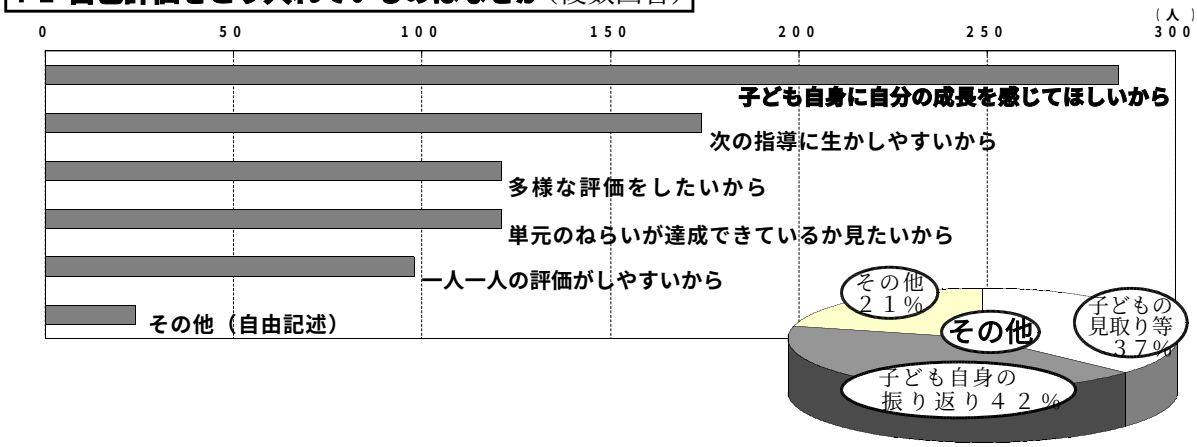
＜総合的な学習の時間における児童の自己評価について＞

4-1 自己評価をとり入れているか



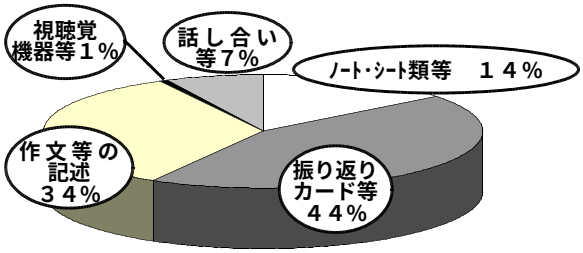
多くの教師は、子ども自身に
自分の成長を感じてほしい
と願い、６割強は
自己評価
をとり入れている。

4-2 自己評価をとり入れているのはなぜか（複数回答）



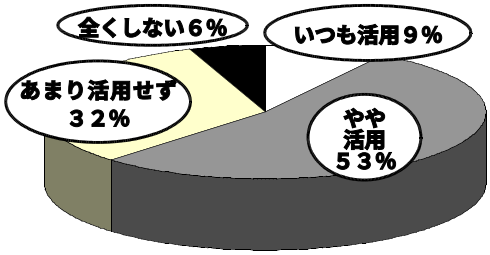
その他の内訳

4-3 どのような方法で自己評価をさせているか（記述）



ほとんどが
記録として残せる方法

5 自己評価を指導に活用しているか



自己評価を指導に十分生かしていない

本実態調査からは、「教師の評価規準に対する認識が不十分であること」「多くの教師が思うように評価が行えずに困っていること」がうかがえる。また、教師は児童に成長を感じてほしいと願いながら自己評価をとり入れ、記録として残しているが、それをあまり活用していないことも明らかになった。そこで、評価規準の作成が教師の指導と評価にとって必要不可欠であることを十分認識するとともに、自己評価を指導と評価に生かせるようにすることが指導と評価の一体化を図る上でも重要であると考えた。

4　研究仮説と研究内容

研究主題

総合的な学習の時間における

自己評価を生かした指導と評価の在り方

研究仮説

子ども自身が単元を通して，明確な振り返りの視点を具体的につかみ，学習活動を振り返ることで自分の成長や変化に気付くことができるだろう。

そして、教師が具体的な評価規準を基に子どもの姿を見取り，明確な視点に基づいた自己評価が進められるように指導していけば，子どもの自己評価能力を高めることができ，教師の行動観察や作品等の見取りとともに，自己評価を生かした指導と評価が充実するだろう。

本研究部会では、子どもの自己評価能力を高め，子どもの自身の成長に生かすことと，教師の指導と評価に自己評価を活用することを重点に研究仮説を上記のように立てた。

この研究仮説の実証のために、まず「評価規準の作成」が欠かせない。なぜなら、教師が子どもに身に付けてほしい力を具体的にもたなければ、子ども自身が単元を通して明確な振り返りの視点を具体的につかむことができないからである。

次に、学習を進める中で子ども自身が、具体的な評価規準から導かれる振り返りの明確な視点を基に、「いつ」「何を通して」「どのように」自己評価していくかが重要になってくる。そこで、より「効果的な自己評価の方法」を研究することにした。

さらに、このような自己評価を教師が見取り、他の多様な評価とともに指導に生かさなければ、研究主題には迫れないと考えた。つまり「指導と評価の一体化」である。これは、教師が身に付けてほしい力の具体的な姿に照らして子どもの自己評価を見取り、他の評価とともにこれを指導に生かしていくことである。

以上のことから、研究内容を「評価規準の作成」「効果的な自己評価の方法」「教師の指導と評価の一体化」の３つに絞り研究を進めることにした。

研究内容

評価規準の作成　　効果的な自己評価の方法　　指導と評価の一体化

5　研究構想図

〈研究の仮説〉

子ども自身が単元を通して、明確な振り返りの視点を具体的につかみ、学習活動を振り返ることで自分の成長や変化に気付くことができるだろう。

そして、教師が具体的な評価規準を基に子どもの姿を見取り、明確な視点に基づいた自己評価が進められるように指導していけば、子どもの自己評価能力を高めることができ、教師の行動観察や作品等の見取りとともに、自己評価を生かした指導と評価が充実するだろう。

Ⅱ　主題に迫るために

１　評価規準の作成

単元を通して、子どもに身に付けてほしい力を焦点化し、それに沿った評価規準を作成する。この評価規準を基に『子どもの具体的な姿』を具体的な言葉で表現し、発達や経験に応じた方法で子どもに示していく。そうすることにより、子どもにとって、自らの学習活動を振り返る際に、何について、どのように自己評価すればよいのかがはっきりし、明確な判断や記述ができるようになる。たとえば、

○○のめあてがはっきり決められる。

と、

○○のめあてについて、前もって考えてきたことを基にして、積極的に意見を言い、みんなで話し合って決めることができる。

とでは、明らかに後者の方が分かりやすく、自己評価しやすい。

また、教師にとっても、子どもの自己評価の観点がはっきりしているので、それに照らし合わせて、子どもの自己評価や学習状況の把握がしやすく、その場ですぐ見取って、それを、指導に生かすことができる。

そのために、『子どもの具体的な姿』や望ましい活動の様子などをあらかじめ想定し、下記のように、評価規準の横に明記した一覧表を作成する。

観点	評価規準	子どもの具体的な姿
問題解決能力	○学習を進める中で**自分なりの考えをもつ**ことができる。	・自分の考えの理由を書くことができる。 ・インタビューした人のメモをしっかりとり、感想などをつける。 ・学習を振り返るときに感想をもって書くことができる。
主体的に追究する力	○自分の思いや願いの実現にむけて**友達と協力**して考える。	・友達と協力して、これからの生活に生かせるような発表になるように意見を出し合える。 ・自分の思いを実現させるための方法を考えることができる。

教師は『子どもの具体的な姿』を基に、指導の重点化を図り、毎回の学習活動や学習過程の要所要所で評価するとともに、その時間の自己評価の視点を明確にすることができる。さらに、この自己評価を教師が見取ったこととすり合わせて指導に生かすことができる。

2　効果的な自己評価の方法

１で述べたように、単元のねらいを焦点化し、学習過程ごとのねらいを絞っていくことで、学習指導や評価の視点がより明確となる。以下、「いつ」「何を通して」「どのように」という視点で効果的な自己評価方法について示す。

(1) どのように（自己評価の方法）

評価規準に沿って自己評価を進めることで、適切な自己評価ができるようになっていく。そのためにも、明確な振り返りの視点（＜例＞自分の考えをもつ）をもって振り返ることが大切になってくる。そこで､学習過程の各段階の始めにめざす姿をとらえる時間をとり、活動後に自分の成長や変化を振り返ることにより適切な自己評価が進められるようになると考えた。

めざす姿をとらえる方法としては､教師提示型･話し合い型・自己発見型等がある。また、自己評価の方法は、記述式を主とする。なぜなら、総合的な学習の時間で求める力は質的な内容の側面であり、記述式はより具体的に個の見取りができるからである。

めざす姿をとらえる
- ・教師提示型　めざす姿を教師が提示しとらえる。
- ・話し合い型　めざす姿を話し合いながらとらえる。
- ・自己発見型　めざす姿を子ども自身がとらえる。

活　　動

自己評価
- **記述式**
- **記述式**＋記述の内容を深める補助的なもの
  （例）スケール・記号など

（単元・段階･各単位時間等で考え方は共通）

(2) いつ（自己評価の時期）

自己評価をいつ行うかについては、子ども自身が成長や変化をつかみやすいところで評価できるよう、意図的に計画されなければならない。

≪いつ≫
①毎時間後
②活動のまとまり後
③学習の各段階
（つかむ・追究する・広げる）後
④単元の終わり

組み合わせる

≪実態≫
・単元の長さ
・子どもの発達段階
・自己評価の経験

≪配慮事項≫・長い単元の場合は、学習活動の区切りごとに行う。
・自己評価に慣れていない場合は、短いスパンで子どもたちにとって取り組みやすいものを多く設ける。
・単元の終わりでは、単元全体を振り返る。

(3) 何を通して（自己評価の資料）

活動を通し意図的に蓄積してきた下のような資料等を活用し､自己評価する。

≪視覚的に成長が分かるもの≫
一言日記　：活動の感想等を自由記述で書く
絵　　：願いや願望を絵で表す
ウェビング･イメージマップ：連想されることを書き出す
ワークシート
自己評価カード
作品・ビデオ・写真　等

≪多様な評価≫
相互評価：友達からのメッセージカード
教師の助言：自己評価カードへのコメント
面談　　等

≪成果物≫
作品・ビデオ・写真　等

３　自己評価能力の高まりと「指導と評価」について

これまでに述べてきたように、単元のねらいに応じた具体的な評価規準を作成することで学習や指導・評価の視点が明確になる。それを基に、効果的な自己評価の方法により意図的・計画的に自己評価を重ねることで自己評価能力が高まると考えた。ここでは、自己評価を生かした指導と評価の一体化についての具体的な考え方について述べる。

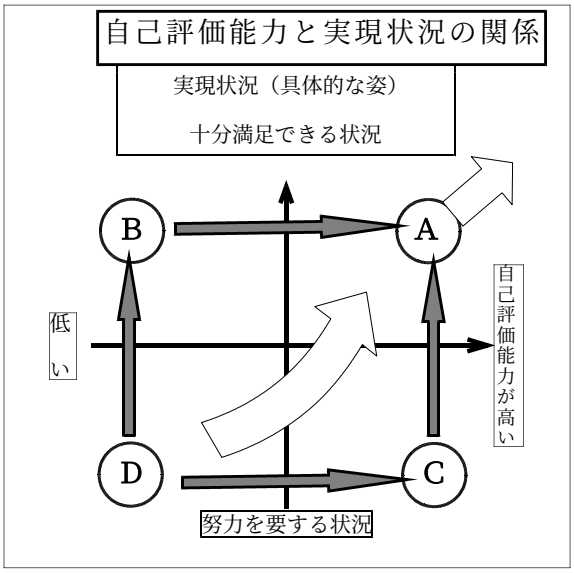
(1) 自己評価をその後の指導と評価に生かしていくために必要な指導（指導の方向性）

① 自己評価能力を高めていく指導　(右図の横軸の指導)

「自己評価能力が高い」とは、明確な振り返りの視点をとらえていることである。自己評価能力を高めるためには、子どもの発達段階やこれまでの自己評価の経験を踏まえた指導をすることが重要である。

② 実現状況を高める指導 (右図の縦軸の指導)

評価規準を基に作られた「子どもの具体的な姿」が見られるようにする指導も重要である。つまりこれは、単元の内容の指導であり、実現状況を高めていく指導である。



このような二つの指導を意図的に行い、子どもが自己評価した結果と活動等を教師が見取り、次の指導へ生かすことで、子どもの実現状況が高まり、自己評価能力も高まると考えた。上図に示すＡのエリアの子どもが最も望ましいのは言うまでもないが、現在Ｂ、Ｃ、Ｄのエリアに位置すると思われる子どもに対しては矢印の方向への指導をする必要があると考えた。

(2) それぞれのエリアの子どもに対する指導

Ａのエリアの子ども (自己評価能力が高く、実現状況も満足できる子)

→　学習を価値付け、さらに、進んで学習を進めるように促す。【全体の場で賞賛する等】

Ｂのエリアの子ども (自己評価能力が低いが実現状況は満足できる子)

→　明確な振り返りの視点をもてるように助言し、同時に実現状況の高い部分を具体的な姿で教える。【自己評価カードへのコメント等】

Ｃのエリアの子ども (自己評価能力は高いが実現状況に努力を要する子)

→　自己評価が適切であることを賞賛し、自己評価の結果を基に具体的な姿を目指して学習を修正できるようにする。【自己評価カードへのコメント等】

Ｄのエリアの子ども (自己評価能力が低く、実現状況も努力を要する子)

→　明確な振り返りの視点をもてるように助言し、実現状況が努力を要することに気付くようにする。その上で、今後の学習の見通し等を修正する。【個別指導・面談等】

以下、Ｐ 13 ～ 21 に本部会研究員全員の実践から、これまで述べてきた１～３の具体例をあげる。

Ⅲ　実践事例

事例１
つかむ段階における実践例　～単元名「自分変身プロジェクト」（４年）～

つかむ	追究する	広げる

（８/30 時間）

【単元の概要】

【成人式とは何か調べている】

高学年に進級するにあたり、「自分たちはどうありたいか」「そのために何をすればよいか」そんな課題を追究した単元である。未来を志向して、"なりたい自分になる"ために、自分たちをより高めていくにはどうしたらよいのかについて考え、体験した。

『自分変身プロジェクト』と題したこの単元では,

１　みんなの将来に生かすという視点から､課題を見付け、学習の見通しをもちながら意欲的に追究できる。

２　追究し，学んだことを発表会で発信し、広めていこうとする。

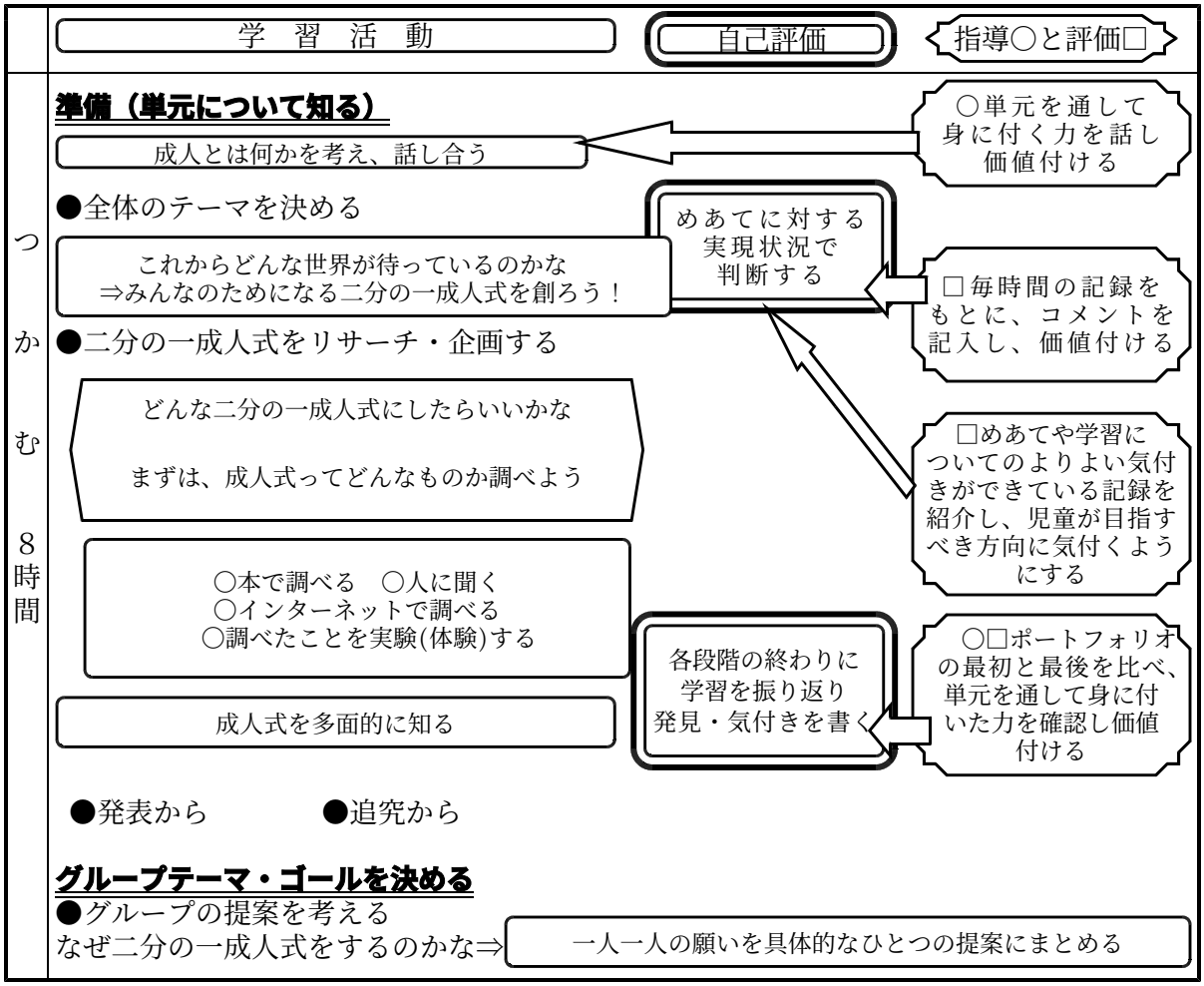
３　自己評価活動を通して，自分のよさを発見することができる。

４　プロジェクト的学習を通して総合的な学習の学び方，自己評価の仕方を身に付ける。

といった単元目標を設定した。

やがて子どもたちは、追究の成果を発表会「二分の一成人式」で伝え合った。この学習を通して、自分たちの可能性を感じることもできたのである。

つかむ段階の指導・評価計画（全３０時間扱い）



つかむ段階の評価規準

観　点	評　価　規　準	子どもの具体的な姿
課題設定の能力	○自分の体験や、国語の教材『二分の一成人式をしよう』と関連付けて、**何のために、何をやり遂げるのか見付ける**ことができる。	・大人のイメージを出したり、大人と子どもの境目について考えたりすることにより、二分の一成人式に対するイメージをつかむ。 ・いろいろな成人式について調べ、二分の一成人式についての自分なりのテーマをもつ参考にできる。 ・「こんな高学年になりたい」という希望をもとに、二分の一成人式に向けて、取り組むテーマが決められる。 ・同じテーマをもつ子ども同士でチームをつくり、互いをより高められるようなグループテーマを決められる。
問題解決・表現の能力	○調べたことを分かりやすい言葉で発表し、**友達と学び合い、高め合う**ことができる。	・グループテーマをもとに、学習計画が立てられる。分かりやすい言葉で発表できる。
学び方・ものの考え方	○自己評価活動を通して、**自分のよさを発見する**ことができる。	・成人式の友達の発表を見て、そのよさなどに気付く。 ・グループの活動を振り返り、自分の成長としてまとめ直すことができる。

自己評価を価値付けた例

【評価規準の作成】Ｐ 10,12 参照

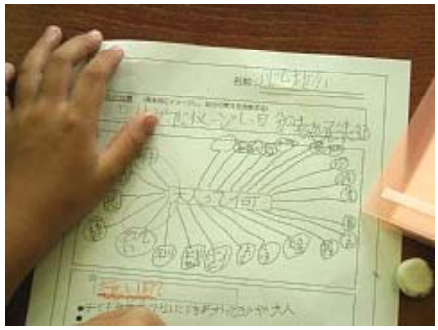
今日の目標；具体的に大人と子どもをイメージし、自分の考えを発表する

自己評価
Ⓒ ⇒　理由は、他の人が来ていて少し緊張して、自分の思ったことを発言することができなかった。

この記述は、ある子どもが、授業の最後に自己評価した際に書いたものである。この子どもは、『今日の目標』をきちんと意識し、「自分の考えを発表すること」ができなかったからＣとした。しかし，実際には右図のようにしっかりとイメージは広げられている。

そこで，次のようにコメントした。

目標をきちんと意識していますね。発表ができなかった所を反省したことはすばらしい。イメージを広げられている所は立派です。



【「大人」のイメージを広げている】

この子どもが感じたつまずきを“目標を振り返る”という視点で指導者が見取ることにより、価値付けた。さらに、次時はこの子どもが活動の目標を達成できるよう個別に指導した。結果が次の自己評価である。

今日の目標；成人式を多面的に知る

自己評価
Ⓐ ⇒　成人式の目的をゲットした。成人式は、やる人の意思で決める。もう少し調べれば、成人式のことがもっとよくわかると思いました。

自己評価から子どもの自己評価の適切な記述を見取り、価値付けることによって、「成人式の目的をゲットした」と振り返りの視点を活動目標に適切に合わせた記述ができた。

振り返りの視点を明確にもてるようにした例

【効果的な自己評価の方法】Ｐ 11(1)(2)参照

つかむ段階では、まだ自己評価に慣れていない子どもたちが自己評価できるようにするため、活動のはじめに『学習の目標』を書き込んだ。さらに、強く意識させるために声に出して確認した。

『学習の目標』を子どもから出すのではなく、指導者が提示したのである。また、学習の終わりにも『学習の目標』を声に出して確認した。これは、振り返りの視点を明確にもてるようにするためである。自己評価する際、自分を振り返る視点として次の３つを掲示し意識できるようにした。

●目標に対してどうだったか
●前の自分と比べて成長したか
●これからどうしていくか

【ポスター「成人式って何」】

自己評価例を紹介する。

自己評価
Ⓑ ⇒　なぜかというと、成人式のことをあまり知ることができていないと思うからです。これからは、目標が達成できるようにがんばります。

『発表からいろいろな成人式を知る』という目標に対して振り返った例である。さらに、この子どもは、次の時間このように自己評価した。

自己評価
Ⓐ ⇒　今日は、昨日と違っていろいろな成人式を知ることができたからです。自分たちの発表もうまくいってよかったです！

『いろいろな成人式を知る』という目標をきちんと振り返りの視点にして自己評価できている。だからこそ、前日にＢだったところを意識的に改善し、次の学習ではＡにできた。また、そのことを自分で気付いて自己評価できたのである。

自己評価から身に付けてほしい力の実現状況を見取った例

【評価規準の作成】Ｐ 10 参照

自己評価
Ⓐ ⇒　いろいろな成人式が分かった。発表では、みんなむずかしいことなどを分かりやすく発表していて、よかった。

この例は、「学び方、ものの考え方」に関する評価規準の具体的な姿『成人式の友だちの発表を見て、そのよさなどに気付く』にあたる。評価規準の作成に当たって『子どもの具体的な姿』を想定することにより、指導に役立つ見取りがしやすくなった例である。

考察

● **効果的な自己評価**

学習の始めに学習目標を書き、声に出して音読した。この指導により、子どもが自己評価する際、混乱なく学習目標に対しての実現状況を書くことができた。

● **適切な自己評価**

適切な自己評価に近付くように、めあてや学習についてのよりよい気付きができている記録を紹介した。これは、全体の場で賞賛することによって、子どもがめざすべき方向に気付くよう意図したものである。この活動を続けることによって、子どもの自己評価に対する意識が高まり、他の子の自己評価にも関心が高くなった。

● **価値付けによる、意欲の喚起**

書く、話すなどの平素からの自己評価のトレーニングが自己評価を生かす実践につながる。また、何のために自己評価し、どんな力が付くのか、付いたのかという価値付けを指導者が行うことによって、子どもの意欲が高まるということが実践を通して分かった。

事例２
追究する段階における実践例　～単元名「みんなの公園大作戦」（３年）～

つかむ	**追究する**	広げる

（18/53 時間）

【単元の概要】

【実際にペンキ塗りをする】

「公園」は３年生の子どもにとって、欠かせない遊び場の一つである。しかし、慣れ親しんだ地元の公園も、少し視点を変えるとそこには今まで気付かなかった様々な問題、工夫していることや、不思議なことが山積していた。

「こんなにゴミが落ちているとは気が付きませんでした。」「いろいろな人が公園を使えるようにしているんだなと思いました。」「倉庫の中身は何だろう？」・・・。やがて、子どもの気付きは課題へと発展していくことになる。「ゴミのないきれいな公園にしたい」「汚いところや壊れているところを直したい」「公園のなんだろうを知りたい」「いろいろな人にとって楽しい公園にしたい」こうして、『みんなの公園大作戦』は出発した。

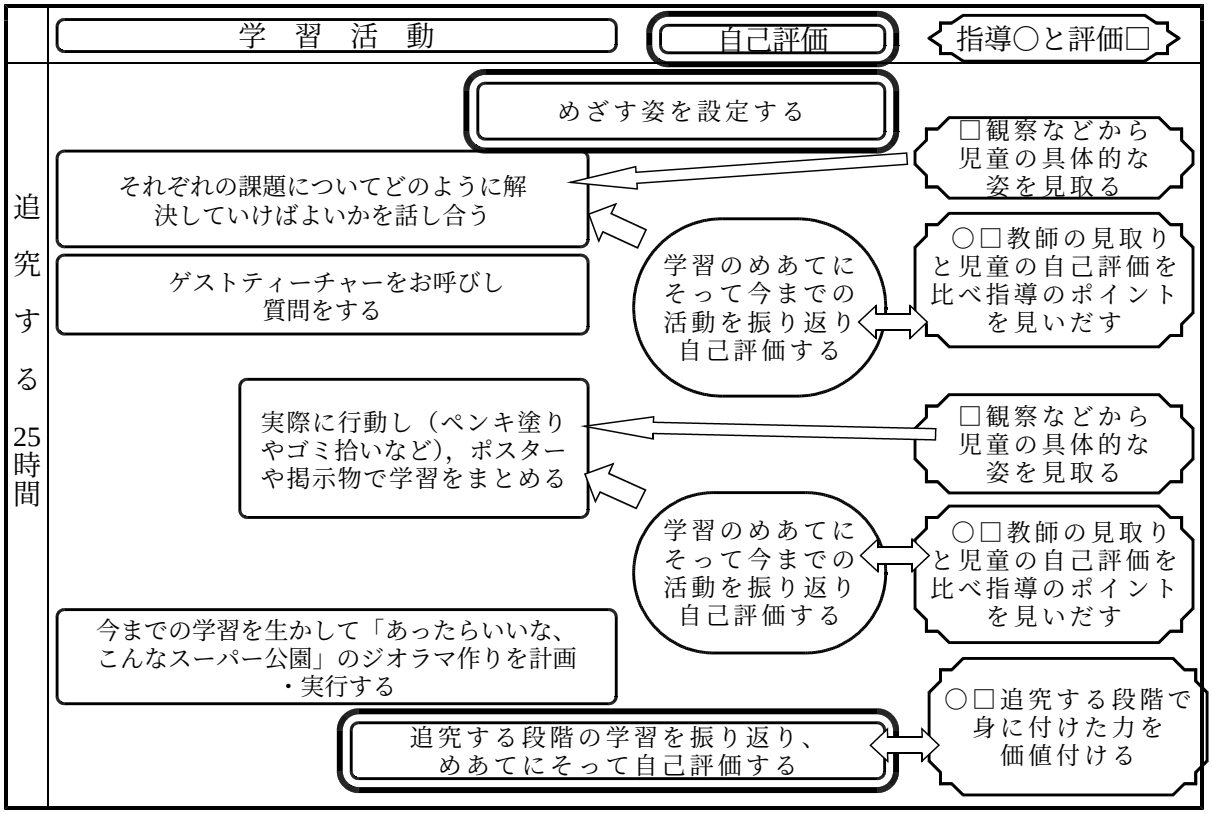
子どもたちの公園に対する願いが課題となり､子どもたちは様々なアイデアを考え出しあった。「ゴミ箱を作ってはどうだろうか？」「ペンキがはがれたベンチをきれいにしよう。」「お花をたくさん植えると、もっと楽しい公園になるのではないか。」・・・。

【花を植えて公園をきれいにする運動】

公園管理事務所の方へ質問をして、公園をよりよくする活動に成功した子どもたちは、この成果を学習発表会で披露することになった。ポスターや公園の模型を作成し、多くの人たちに、自分たちの考える理想の公園や、公園の不思議・マナーについて呼びかけた。

「自分たちの考えや行動で、自分たちの生活が改善されていく」ことが確かめられ，半信半疑で始めた大作戦は大きな自信とともにその幕を閉じた。この活動を通して公園の多面的なよさや問題点に気付き、これをよりよく解決していくことで、自分たちの可能性（自己の生き方）にふれることができた。

追究する段階の指導・評価計画（全５３時間扱い）



追究する段階の評価規準

観　点	評　価　規　準	子どもの具体的な姿
問題を解決する力	○よりよい公園をめざして、自分たちができることを**友達と協力**しあいながら考え、**見通しをもち**ながら，**実行する**ことができる。 ○よりよい公園にするために、管理事務所や区役所の人に質問するなどして、**人とのかかわりから学ぶ**ことができる。 ○学習を進める中で**自分なりの考えをもつ**ことができる。	・友達の意見を聞き，自分の意見を伝え，班の中で協力的に話し合う。 ・話し合いの中で決まったことに気持ちよく賛同する。 ・その日の活動のめあてを果たす。 ・次回の活動を考えられる。 ・ゴミ拾いやペンキ塗りなど，集中してがんばる。 ・自分の考えの理由を書くことができる。 ・インタビューした人のメモをしっかりとり，感想などを書く。 ・学習を振り返る時に感想をもつ。
表現する力	○見る人が**見やすいように**、調べた結果や自分の意見を伝える工夫ができる。	・意識してきれいな字を書く。 ・絵や図・表などを分かりやすく入れる。 ・学習の経緯が分かるように工夫する。

児童の一言日記から，身に付けてほしい力を見取った例

【評価規準の作成】Ｐ 10 参照

9/30	◎	どうして◎かというと，今日は「公園の直したい所」をプリントに書いて発表するときに，きのうよりもスムーズに話し合いができたからです。今日はみんなで協力したから早くできたと思います。

これは，子どもの具体的な姿の，「友達の意見を聞き，自分の意見を伝え，班の中で協力的に話し合う」に相当する。つまり，評価規準の「**友達と協力**し合いながら」の実現状況が見られたと言える。

そこで一言日記の余白に

（すばらしい！！その通りです。
友達と協力する力が昨日よりアップしていますね。）

【一言日記を書く子】

とコメントを付けた。このようによりよい気付きに対して賞賛し，自分の成長を感じられるような価値付けをしていくことができた。

この学習段階のめざす姿は「自分の考えをもとう」であったが，このように一言日記には，重点化しためあての他に，子どもの感想などから，身に付けてほしい力を見取る機能も期待できる。

自己評価から自分の成長を感じられた例

【効果的な自己評価方法】Ｐ 11 参照

追究する段階の区切りのよいところで（６時間分）振り返る活動を入れた。子どもの自己評価カードには，以下のような記述が見られた。

【自分の成長を語りたい】

自己評価・『できた』（10/9）
「始めの方は，話し合いやアイデアがあまり出せなかったけど後からうまくできたからです。」

自己評価・『よくできた』（10/9）
「どうしてよくできたかにしたかというと，自分の考えをたくさんもてたからです。あと，アドバイスや葉っぱの数もたくさん出せるようになったからです。」

効果的であったのは，比較できる評価資料が明確であった点が挙げられる。自分のアイデアを出すワークシートと，見通しをもつウェビング（これを子どもは葉っぱと呼ぶ）が時系列に整理できていたため，始めと終わりのワークシートを見比べることで，自分の成長をより感じることができた。

このように，自己評価場面を意図的，計画的に設定することで，自分の成長を感じることのできる自己評価に高めることができた。

めざす姿を提示し、活動のまとまりごとに自己評価をしていった例

【効果的な自己評価の方法】P11 参照

追究する段階のめざす姿**「自分の考えをもとう」**

具体的な例 ⇩

「アイデアを出そう・理由も書こう・教え合おう」

活動・①公園大作戦のアイデアを出す。
②アイディアを具体化するウェビングを作る。
③友達同士で教え合う。
※これを課題ごとに繰り返す。（４回）

振り返りタイム（明確な振り返りの視点）
「アイデアを出せたかな？理由も書けたかな？
友達と教え合えたかな？」

追究する段階に入ったときに，学習のめあてづくりをした。これが「自分の考えをもとう」である。発達段階を考え，めあてをある程度教師側が示し，活動に合わせて具体的な例を挙げることにした。

具体的な例が「アイデアを出そう・理由も書こう・教え合おう」である。こうすることで，振り返りの視点が明確となり，子どもが適切な自己評価をすることができた。

自己評価カードには以下のような記述が多く見られた。

自己評価・『できた』
「アイデアはたくさん書けたけど，もう少し友達にアドバイスをしていれば，よかったと思うからです。」

子どもの一言日記より、つまずきを見いだし、指導に生かした例

【指導と評価の一体化】P12 参照

9/29	△	どうして△かというと，話し合いがまとまらなかったからです。
9/30	◎	どうして◎かというと，きのうより話し合いがまとまったからです。アドバイスもできてよかったと思います。

９月２９日の活動は，ゴミのないきれいな公園にするためのアイデアを出し，班の中で話し合う活動をした。この日の一言日記にはこのような記述をした子どもが多く見られた。マークで見ると，◎=よくできた３人・○=できた１１人・●=もう少し８人・△=がんばろう５人であった。

一言日記から子どもの多くにつまずきがあることが見られたため，次時の活動では，友達へのアドバイスの仕方等をモデル班を作って丁寧に指導した。指導の成果が９月３０日の一言日記に伺える。マークで見ると，◎=２０人・○=６人（１名欠席）という結果であった。

マークはあくまでも，記述を助ける補助的なものであるが，一言日記のマークは，その日の子どもの満足感や成就感・関心・意欲を素早く見取る一つの材料にもなることも分かった。

【指導後、満足感をもって一言日記を書く】

考察

● **具体的な評価規準を作成すること。**
具体的な評価規準を作成し，それをもとに子どもの具体的な姿を作成することにより、子どもの見取りが的確にでき、賞賛などの　声かけが、統一してできた。

● **比較できる資料を意図的・計画的に記録として残しておく。**
このことにより、自分の成長を感じられる自己評価につなげることができる。また、自己評価をする時期も、このような資料が整ったときがよいと分かった。

● **めざす姿を具体化すること。**
これは、評価規準の子どもの具体的な姿に照らして作成することができる。こうすることで、具体的に、どんな学習が価値ある学習につながるのかが子どもの中ではっきりすると分かった。

事例３
広げる段階における実践例　～単元名「広げよう私たちの世界！」（４年）～

つかむ	追究する	広げる

（27/31 時間）

【単元の概要】

本校では毎年４年生が中心となって「東南アジア青年の船」との国際交流を行っている。

【相互評価活動の様子】

【つかむ段階】「楽しい思い出をつくりたい。」「日本をもっと好きになってほしい。」といった前向きな思いや願いをもたせ、慣れ親しんだ日本の文化やよいところをどのように伝えることができるだろうかという課題意識を育て、意欲的に学習活動を進めていけるように指導をした。

【追究する段階】まず、伝えたいものについて、自分たちがよく知らなければならないことに気付き、「詳しい人に尋ねる。」「放課後集まって踊りを習いに行く。」「図書館に行って調べる。」「一緒にできることをする。絵や写真をみせる。」「ポスターや図にする。」等グループごとに追究計画をたて、それぞれの追究活動を進めていった。中間発表などで相互評価を取り入れ、改良を加えながら「交流会」を迎えた。

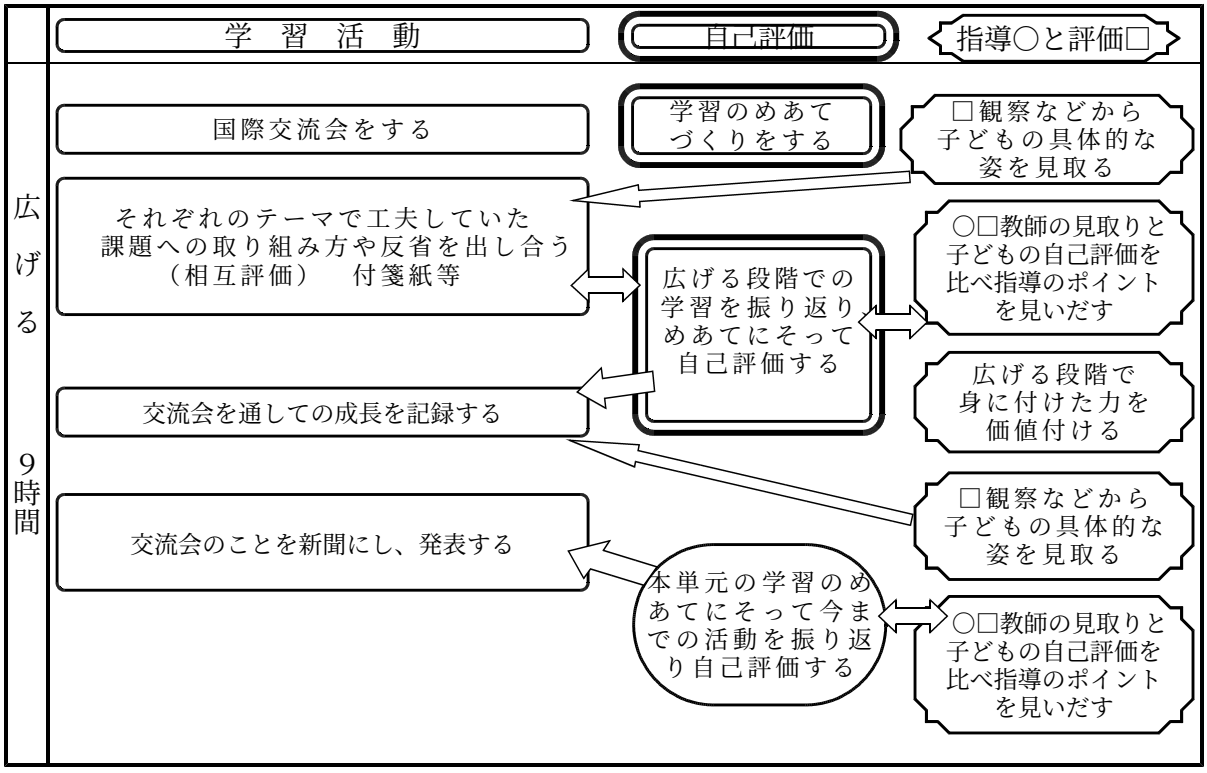
【紹介活動の様子】

【広げる段階】交流会を体験し、どの子も達成感や成就感を得た。この日の成果とそれまでの活動の成果を振り返り、うまく説明できたか、どんな反応が返ってきたのか等を学習発表会で披露した。

また、来年度に経験する後輩に向けて、自分たちの考える理想の交流や、国際交流会の楽しさ・できた喜び、成就感・達成感を盛り込んだ新聞を作成し、この単元の学習のまとめを行った。

「自分ももっと日本を好きになった。」「（相手の喜ぶ顔や姿を見て）もっと交流したい。」などの喜びや自己肯定感を含んだ気付きがみられつつあった。この単元の学習を通して日本の文化に気付き、日本のよさをもっと伝え国際交流していこうという、自分たちの可能性（自己の生き方）にもふれることができた。

広げる段階の指導・評価計画（全３１時間扱い）



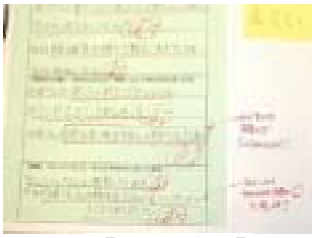
広げる段階の評価規準

観　点	評　価　規　準	子どもの具体的な姿
課題を設定する力	○交流会や日本の文化紹介での**めざす姿をつかむ**。	・相手に分かるように伝えるにはどうしたらよいか、課題意識をもつ。
表現する力	○人とのかかわりや交流会で学んだことを**相手の立場を考えて発表**する。 ○**積極的に交流し、相手に分かるように工夫して表現**をする。	・具体的な活動のめあてをもち、めあてに沿って自分の役割分担をしっかり果たす。 ・学習を振り返る時に感想やその理由を述べる。 ・相手を意識して、理由や考えを表現する。 ・絵や図・表などを分かりやすく入れる。 ・相手のこと（反応・意見）を考えて行動する。
生かす力	○活動から**学んだことを生かし**、自分の**考えを広げたり**次の学年に**伝えたり**する。	・学習活動を振り返り、学習で得た喜びや発見を友達と共有したり、国際交流への関心を高め自分の考えを広げたりする。 ・新聞にまとめ，次の学年に伝える。

一言日記を活用して「めざす姿」を意識できるようにした例

【評価規準の作成】P10 参照

Ａ児　きんちょうするけれど説明の声を大きくする。
Ｂ児　ゲストに喜んでもらえるようにする。
Ｃ児　相手の目をみて言うようにする。
10/5　一言日記より



【記録と資料】

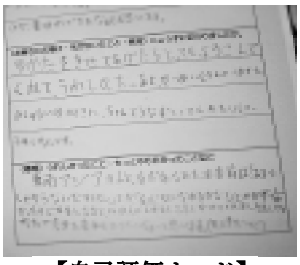
一言日記には、自分のめあてを書くよう指導した。二重丸や花丸、具体的な手だてや手法のアドバイス等を記入して一人一人とやりとりを行った。

一言日記から課題に取り組むよい気付きを教師が紹介し、発表の仕方や話し方等に分類してまとめた。それをめざす姿として、掲示した。このようにして，いつでも明確な振り返りの視点（めあて）を意識できるようにした。

また、活動中はめざす姿を意識して活動することができたかを記述するように指導し、よい書き方を全体の場で取り上げて賞賛した。

過去の自己評価等から、自己の成長を振り返った例

【効果的な自己評価の方法】P11 参照



【自己評価カード】

子どもたちは，心で伝えるには、相手の目を見て、ゆっくり大きな声で（恥ずかしがらずに）説明することが必要であると気付いた。

交流会当日、英単語や身振り手振りを駆使しながら、相手の目を見てコミュニケーションを自分からとろうと活動していた。交流会は「大成功でした！」「楽しかった。もっとかかわりたいです。」という達成感や喜びであふれていた。

後日、自己評価カードに交流会での学習活動をまとめた。発表態度と追究テーマへの取組・努力が記され、相手の反応を見て臨機応変に『心で伝える』努力をして、どの子も積極的・主体的にかかわれていたことが記されていた。

本単元のまとめとして、今までの資料や自己評価カード・相互評価のコメント等の全てをスクラップしてきたもので振り返った。以前の自分と発表態度や聞く態度に注目して比較したところ、コミュニケーションの楽しさや追究してきたことがうまく伝えられたことに気付き、成長の喜びを発表し合った。また、まとめ新聞や一言日記の中に「相手の国を知りたい。」「日本をもっと教えたいな。」「３年生にも教えたい。」といった国際交流の単元を自ら発展させたいという意欲的な記述も見られた。

一言日記の自己評価を指導に生かした例（4つのエリアに応じた指導をした例）

【指導と評価の一体化】P12 参照

【　交流の様子　】

日本語で話しても、ちゃんとわかってくれました。
それがとってもうれしかったです。

何をどうしたらよいか，わからない。
9/30　一言日記より

一言日記に、こう書き記した子どもがいた。めざす姿がとらえられていないため、明確な振り返りの視点がもてないでいる子どもである。自己評価能力と実現状況の関係図（Ｐ１２図）で見ると、現在，Ｄのエリアに位置している子どもである。

そこで、テーマについて個別に話したり、友達との相互評価を取り入れたりして、めざす姿をとらえられるよう指導した。また、明確な振り返りの視点（ポイントやめあて）を掲示していつでも見直して自己評価できるようにした。

その結果、友達の発表や相互評価を参考にしながら、

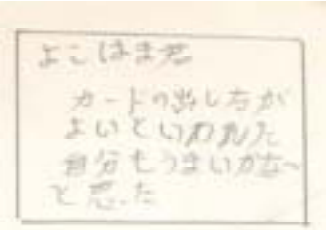
自分は折り紙の説明で，ゲストの人と 一緒にやってみることにしました。
10/7　一言日記より

と，意欲的な記入をすることができるようになった。実際の交流会では左の吹き出しのような感想をもてた。

このように、子どもの一言日記を見取り、エリアに応じた指導をすることで、実現状況を高めることができた。

相互評価を自己評価に生かした例

【効果的な自己評価方法】P11 参照



【付箋紙を使った相互評価】

練習の時は声が小さかったけれど、当日、説明の声を大きくしたら黄色の紙（付箋紙）に声が大きかったと書いてもらえました。
うれしかったです。

交流会での友達の活躍や頑張りを、相互評価で、伝え合った。友達の良いところを付箋紙に書き込んだり、拍手で伝えたりして、自分たちの成長をともに認め合った。

受け取った付箋紙を嬉しそうに読み合い、スクラップブックに丁寧に書き取った。また、自分の考えや感想が発表されると、拍手や相づちをし合う姿が見られた。

友達の考えや表現のよさに気付くだけでなく、相手の気持ちを考えたり、ゲストの反応を思い出して体験活動を共有し合ったりすることもできた。

その活動の後、自己評価カードに、めざす姿を意識して「交流することができたか。」「説明をしていた時、相手の反応はどうであったか。」について記述した。

内容の記述を見てみると，左の吹き出しのように，成功した理由として、友達からもらった言葉を基にして、自分の成長を記述する子どもが多く見られた。

考察

- **自己評価の明確な振り返りの視点を焦点化しておく。**
  子どもの思いや願いへの具体的な取組を、めざす姿として掲示する。視点に沿って自己評価をするように常に振り返れるようにした。ワークシートの記入事項を吟味して提示することが重要だと分かった。
- **振り返りや比較ができる資料や相互評価の記録をスクラップしていく。**
  自分自身を見直すきっかけにつながった。段階ごとの視点と課題に沿った振り返りが対応していると比較しやすいことが分かった。
- **一言日記をつけていく。**
  活動の記録・課題へ取組む意欲・計画の見通し・つまずき・考え・質問などが書けるようになった。そこから子どもの活動を素早く見取り、助言や価値付け・励ましを行うこともできた。
- **４つのエリアに応じた指導をする。**
  自己評価から、どのエリアのあたりに現在その子が位置しているかを見取り、エリアに応じた指導をすることで、子どもの自己評価能力や実現状況を高めていくことができた。

Ⅳ　研究の成果と今後の課題

１　研究の成果　（※Ｐ 23,24 の参考資料１, 2 を参照）

(1) 子ども自身が単元を通して明確な振り返りの視点を具体的につかみ、学習活動を振り返ることで自分の成長や変化に気付くことができた。

① 評価規準を作成することにより、子どもが自らの学習活動を振り返る際に、何について、どのように自己評価すればよいのかがはっきりし、明確な判断や記述ができるようになった。(評価規準の作成)

② 子どもの自己評価について「いつ」「何を通して」「どのように」という視点で効果的な自己評価の方法を分析し実施したことにより、自分の成長や変化に気付くことができる自己評価ができるようになった。(効果的な自己評価の方法)

(2) 教師が具体的な評価規準を基に子どもの姿を見取るとともに、明確な視点に基づいた自己評価が進められるように指導していったので、子どもの自価評価能力を高めることができた。その結果、教師の行動観察や作品等の見取りとともに、自己評価を生かした指導と評価が充実した。

① 子どもの発達段階やこれまでの自己評価の経験を踏まえた指導をすることにより自己評価能力が高まった。(効果的な自己評価の方法　指導と評価の一体化　Ｐ２３参照)

② 単元や各時間における評価規準に沿った子どもの具体的な姿を明記したので、毎回の学習活動や学習過程で自己評価を含めた学習状況の把握がしやすくなり、自己評価を生かした指導と評価が充実した。(評価規準の作成、効果的な自己評価の方法　指導と評価の一体化　Ｐ２４参照)

③ 子どもが身に付けた自己評価能力を前提に見取った自己評価の状況と、教師が直接的に子どもの活動や作品等から得た多様な評価とを総合的に評価することにより、自己評価を生かした指導と評価が充実した。(指導と評価の一体化　Ｐ２４参照)

(3) 単元を終えた子どもの声から

適切な自己評価により常に自分を客観的にとらえ、成長が実感できたこと、めざす姿の達成を実感として味わうことができたこと等により、子どもから「総合的な学習の時間が楽しい」 という声が聞かれ、子どもが学習の楽しさを味わうことができた。

２　今後の課題

(1) 学習の流れと一体となった自己評価の方法を改善する

自己評価活動をすることで学習の流れがとぎれないように、より効果的な自己評価の方法を工夫する。また、自己評価をすることで子どもが自分の成長を実感し、「学習が楽しい、自己評価が楽しい」と感じられる自己評価の在り方を今後も検討していく必要がある。

(2) 本研究につながるその他の課題

「自己評価と個人内評価の関係」、「自己評価と自己肯定感とのかかわり」、「自己評価能力と相互評価の相乗効果について」等、今回の研究で取り上げなかった内容について、今後、研究と実践を深め検証していく必要がある。

参考資料１

効果的な自己評価方法の考え方・例（P11の(1)(2)より）

効果的な自己評価方法となるためには、自己評価を単元の特性・子どもの実態等を考慮して組み合わせて指導することが大切である。ここではその傾向と考え方を例示として取り上げた。

① 単元の長さと自己評価の時期

長さ	自己評価の時期	
長い単元	活動のまとまりごと	毎時間
短い	学習過程ごと	

単元の終わりには単元全体を振り返る時間を確保する。また、子どもが学習活動を覚えていられる長さ・学習の区切りなどで自己評価をする時期を予定する。

毎時間の自己評価は一言日記のような形で行う。

② 子ども実態と自己評価の指導の頻度

実態	指導の頻度
自己評価に慣れている	長いスパンで
自己評価に慣れていない	短いスパンで易しいものを

自己評価に慣れてくると，自己評価の時間を設定しなくても、自ら自己評価をするようになる。

そこで，自己評価に慣れていない時期の指導では自己評価能力を高める指導が大切になる。

③ 子どもの実態と振り返りの視点の関係

実態	振り返りの視点
自己評価に慣れている	評価資料を自分で選び，具体的な視点も自分で選ぶ
自己評価に慣れていない	具体的な視点を教師が提示し評価資料も明確に

自己評価に慣れていない場合は、どの評価資料をどのように見るのかを丁寧に指導する。

逆に慣れてくれば，大きな振り返りの視点を与え、子どもの観点も大切にしていく。

④ 子どもの実態とめざす姿のつかみ方の関係

実態	つかみ方
自己評価に慣れている	子ども自身が発見したり，話し合いを通してめざす姿をつかむ
自己評価に慣れていない	教師と話し合ったり、教師が提示してめざす姿をつかむ

初期にはめざす姿を子ども自身がつかむのは難しい。教師が提示し何度も確認することが大切である。しかし、経験を重ねる中で徐々に自分でめざす姿を決められるようになる。

⑤ 学習過程に応じて，自己評価の方法を組み合わせた事例

学習過程	時期	頻　　度	振り返りの視点	めざす姿のつかみ方
つかむ	活動のまとまりごと	小さなスパンで易しいものを数多く（２～３回）	評価資料・具体的な視点ともに提示	教師提示型
追究する	毎時間	毎時間 自分たちで立てためざす姿に沿って振り返る	評価資料は明確にしておき、具体的な視点は子どもに任す	子ども中心の話し合い型
広げる	単元の終わり	全体のまとめとして一回 自分の成長について自由記述	資料・視点ともに子どもに任す	自己発見型

参考資料２

評価規準・教師の見取り・指導と評価の一体化の関係（Ｐ12及び実践例より）

この表は、評価規準と、教師の見取り、そして指導と評価の一体化につながる相関関係を事例を基に表したものである。まず、評価規準の作成から、子どもの具体的な姿を設定し、これをもとに教師が行動観察・作品・ワークシートなどから子どもの実現状況を見取る。同時に子どもの自己評価も見取る。これにより、子どもの自己評価能力を見取り、これを高める指導もしつつ、実現状況を高める指導にも役立てる。

Ｐ．16～18　実践事例２：「みんなの公園大作戦」（３年）より

観点／評価	課題を設定する力		問題を解決する力
評価規準からの具体的な姿	・ゴミが多い，ベンチが汚い落書きがあるといった問題に気付く。	・自分の興味・関心のあることを選び，課題とする。	・自分の考えの理由を書くことができる。 ・友達の意見を聞く。 ・自分の意見をもって伝える。
⇩ めざす姿	『たくさんのことに気が付こう』	『よりよい公園になるために「○○したい○○になったらいいな」を見つけよう』	『自分の考えをもとう』 具体的には 「アイディアを出そう」「理由も書こう」「教え合おう」
⇩ 教師の主な見取り	ゴミの数を数え、感想などもワークシートに書き込んだ。 （行動観察）	こんな公園になってほしいというアイディアがたくさん書けた。 （ワークシートより）	アイディアの量がたくさん書けている。理由もしっかり書けており、友達にもいいアドバイスができた。 （ワークシート・行動観察）
⇩ 子どもの自己評価	「○○公園では、ゴミがけっこう多かった」 （記述）	「なぞの倉庫の中身は知りたいけど、安全な公園づくりはできるかどうかちょっと自信がない」 （記述）	『よくできた』 「自分の考えをたくさんもてたからです。あとアドバイスや見通しがしっかりもてるようになったからです。」 （記述）
⇩ エリア	Ａのエリア	Ｃのエリア	Ａのエリア
⇩ 教師の指導 具体的コメントと指導の方向	「たくさんのことに気付けましたね」 （コメント） クラス全体の場で賞賛し、価値付ける。	「やれそうかどうか、自分でよく考えていますね」 （コメント） 具体的に公園管理事務所との連携の話をし、質問やお願いができることを教える。	「アイデアをたくさん出せるようになりましたね。友達へのアドバイスも立派でした」 （コメント） クラス全体の場で賞賛し、価値付ける。

平成１５年度教育研究員研究報告書

東京都教育委員会印刷物登録
平成１５年度　　第３１号

平成１６年1月２１日

編集・発行　　東京都教職員研修センター
所在地　　東京都目黒区目黒１－１－１４
電話番号　０３－５４３４－１９７６

印刷会社名　　勝田印刷株式会社